星野秀利著、齊藤寛海訳『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』

高田京比子

一

本書はイタリア経済史の碩学で、国際的にも評価の高い故星野秀利氏（一九九一年没）の代表作 *L'arte della lana in Firenze nel basso Medioevo. Il commercio della lana e il mercato dei panni fiorentini nei secoli XIII-XV*, Firenze, (ed. Olschki), 1980. の翻訳である。一九六二年の渡伊後イタリアにおいて研究を続けられた著者は、一九七七年ボローニャ大学文学部教授となり、その後フィレンツェ大学文学部でも教鞭を執られた。日本よりはむしろイタリアにおいて活躍し、そこで生涯を閉じられた研究者であるが、その間の苦労や著者のフィレンツェに対する思いは、本書に差し挟まれた星野陽子夫人のエッセイに語られている。本書の表題ともなっているフィレンツェ毛織物工業は、著者がイタリア各地の古文書館に残る膨大な史料の山と闘いながら、文字通り生涯かけて追求してこられたテーマであった。一方、訳者齊藤氏は、生前の著者とも親しかった我が国のイタリア中近世経済史の第一人者である。著者が他界している以上、翻訳者としては最適任であり、本書訳出の労を取られたことに対して、ここに感謝と敬意を表したい。

さて、本書は、わが国の西洋史学が本国の研究とあらゆる面で対等のレヴェルに立ち、ヨーロッパの学界で独自の立場を主張した先駆的研究の一つである。故に、貴重な書であることは言うまでもなく、原著の価値については、既に故清水廣一郎氏が一九八〇年の『回顧と展望』で余すところ無く述べ、本書の特徴である実証性の高さ、国際的連関の中でフィレンツェ毛織物工業を捉えるという日本人ならではの視点の新しさ、ポレミックな色彩についても、簡潔かつ的確に評価されている。① また、経済史の専門的な観点からは、すでに訳者でもある齊藤氏の書評が出ており、星野氏の業績を高く評価する一方で、一四世紀前半の毛織物生産量の推定方法に関しては根本的な疑問を提示している。② 従って、ここでそれらを繰り返す必要はなかろう。ただ、両者とも十数年前に発表されたものであるため、我が国の学界における原著の記憶はいくぶん薄れてしまったのではないかと危惧される。そこで、今回、現在もフィレンツェ毛織物工業研究のトップレヴェルに位置する本書が、日本の読者のために翻訳されたということで、本紙で原著の内容を改めて紹介し、その価値を論ずることは、十分意味あることだと考える。

最初に、本書のテーマについて少し述べておこう。フィレンツェといえば、ルネサンス時代に開花した文化の豊かさや、現在まで古文書館に残されている豊富な史料ゆえ、古今東西さまざまな歴史家の注目を集めている都市である。が、一三世紀後半―一六世紀における経済的繁栄も、多くの研究者の関心を集めてきた重要な理由であり、同市の経済活動、特に当時のイタリアの代表的

な産業であった毛織物工業については、古くはイタリアにおける「資本主義化」の観点から、ドーレンを筆頭に様々な議論がなされてきた。③現在では、そのような議論が活発に行なわれることは少ないと思われるが、毛織物工業が、商業・金融業などと並んで中世フィレンツェ経済の繁栄を支えた重要な産業であったことにはかわりない。さらに当時、フィレンツェ毛織物は高級品として各地で名声を博していた。星野氏が、イタリア留学以前から一貫してフィレンツェ毛織物工業への関心を持続されたのも、当然といえよう。

しかし、著者が渡伊以前に行なった研究は、封建制から資本主義への移行過程におけるイタリアの特殊性という観点からフィレンツェ毛織物工業を研究するという性格が強く、史料的にも理論的にも現在の研究水準からは問題を含むものである。④もっともそれは、星野氏個人の問題というより、我が国の学界事情や、フィレンツェ毛織物工業に関する当時の国際的な研究レヴェル自体の限界によるものであった。イタリア留学後星野氏が発表された論考は、まさにこのような研究の遅れを埋め、中世後期のフィレンツェ毛織物工業の実像に迫ることをめざしたものである。本書はいわばその集大成であり、そこにおいてフィレンツェ毛織物工業の歴史的安定性が主張されると共に、その質的転換の経緯が詳らかにされたのであった。では以下、各章ごとに、より詳しく内容をみていくことにしたい。

二

まず、序言では、本書の研究史上の意義が述べられる。従来、経済史家たちは、史料不足と経済史的先入見から、中世後期のフィレンツェの毛織物工業の盛衰を、一四世紀の危機ないし経済不況と関連づけて描くことで満足していた。このような状況に対して本書は、量的変化を確実に跡付けられない場合、利用可能な史料を組み合わせながらいかに質的方面から経済史を描くかという課題に挑戦し、同工業の真の姿に迫ることを目的とする。

第一章は、「中世後期の関税表や諸税表からみたイタリア毛織物の歴史地理」と題し、イタリアの毛織物工業全体の中でフィレンツェの毛織物工業が占めていた地位を明らかにする。著者が関連文献を網羅的に渉猟し、さらに各地の古文書館を訪問して収拾した、一三世紀初から一五世紀初にわたる三五都市のデータによると、次の事実が明らかになる。まず、一三世紀前半、イタリア市場において優勢だったのはフランス毛織物と呼ばれるフランドルを中心とする輸入毛織物製品であった。当時イタリア産の毛織物でみられるのは、わずかにロンバルディア地方の物だけである。また、一三世紀後半にはフィレンツェ毛織物が各地の税表に登場しはじめるが、この毛織物はロンバルディア産の毛織物と大して質的に違わない安価なものであり、高級なフランス毛織物には匹敵しなかった。即ち、一四世紀初までのフィレンツェ毛織物の質は、イタリア北部の多くの都市とさほど変わらず、最高級毛織物に関しては、フランドル製品が市場を完全に独占していたのである。

では、いつからフィレンツェの毛織物がイタリア市場に輸出されるようになったのだろうか。第二章「一四世紀中葉までのフィレンツェ毛織物の価格と市場」によると、それは、一三世紀末以降である。この時期フィレンツェ毛織物の輸出が増大し、本格的な商業進出が始まるのである。しかしこれは、同市の商人階層が、教皇との政治的結びつきのおかげで、経済的に躍進したためであった。つまり品質改良によって市場が拡大したのではなく、専ら最初の商業進出はフィレンツェのグェルファ化（教皇派化）という政治的理由によるものであったということである。そこで開拓された市場は、主にイタリア内部であり、特に重要であったのは競争相手の少ない南部であった。またフィレンツェ市内への卸売りも無視できないものであるが、一四世紀前半においては高級毛織物としてはまだまだフランス毛織物が優勢であった。一三二〇年代には価格の上昇がみられるというものの、フィレンツェ製品は、まだ質的にフランス毛織物に及ばなかった。

第三章「一四世紀の西欧経済事情とフィレンツェの工業化」において、ようやく我々は、フィレンツェ毛織物工業の最初の構造転換、すなわち高級毛織物生産への特化と、地中海市場の最高級毛織物に関するフィレンツェの独占体制の開始を目のあたりにすることになる。従来、経済史家たちは、イタリア、とりわけフィレンツェの工業化の進行を、一三世紀末の西欧経済の構造変化――フランドルの毛織物工業の危機・シャンパーニュの諸定期市の性格変化など――と関連づけて説明してきた。例えば、イギリスでフィレンツェ商人が活発に活動したことを、フィレンツェへのイギリス原毛（他の羊毛に比べて品質が良い）の大量輸入と結びつけ、これがフィレンツェにおける最高級毛織物生産の特化につながったとするのである。しかし、それはあまりに短絡的で、当時の毛織物組合の規約、毛織物工業組合の仲買人の手数料金表などを検討すると、西地中海を中心とする様々な地域の羊毛が言及されていることがわかる。一四世紀前半のフィレンツェはイタリアを含むあらゆる地域から、あらゆるタイプの羊毛を輸入し、低品質からフランドル＝ブラバンには及ばないとはいえある程度高品質まで、種々の毛織物を生産していたのである。

ただし、フィレンツェの毛織物工業は一四世紀前半まったく変化しなかったわけではない。例えば、一三二〇年代には「フランス風」と呼ばれる新しいタイプの毛織物が登場するし、組合の規約からも、この時期フィレンツェの毛織物組合が品質の改良に努力していたことが窺えるのである。一三二〇年代にフィレンツェ毛織物価格の上昇がみられるが、これが良質のイギリス原毛を使用した「フランス風」の模造品の製造によるものであることは確実であろう。実際、この一三二〇年代というのは、フランドル諸地方における毛織物工業の衰退の開始時期でもあった。フィレンツェの織元たちは、フランドル、ついでブラバン地方の衰退に伴い、イタリア市場やレヴァント市場向けに伝統的なフランス毛織物の代替え品を提供し始めたのである。この模造品生産によって、フィレンツェ毛織物工業は質的向上を開始し、一四世紀末には、地中海地域の最高級毛織物市場を、ほぼ完全に独占する。そして、ついにはイタリアの他の地方で、フィレンツェ毛織物の模造品さえ作られるようになった。

第四章「一四世紀後半から一五世紀初頭までのフィレンツェ毛

織物の発展」では、まず、一三五五―七〇年に活動したデル・ベーネ会社の経営の実態を詳らかにすることから、当該時期のフィレンツェ毛織物工業の実像に迫ろうとする。同社の資本金、利潤の分配、原毛の輸入状況、毛織物の生産量、雇用者の種類と人数、支店の開設とその活動内容などを、史料から可能な限り復元し、同社が高級毛織物の生産に特化していたこと、初期はヴェネツィア、ついでナポリを主な販売拠点としていたこと、一三六〇年代には経済不況の波を被ったことなどが明らかにされる。次いで著者は、この会社の経験に、他の会社の例を付け加え、一般的考察を試みる。それによると、一三二〇年代に始まり、それに続く時期に進展したフィレンツェにおける高級品生産への特化の過程は、国際的金融会社の倒産や黒死病の到来にもかかわらず、中断することなく進行した。また、一三六〇年代末高級毛織物は過剰生産により壊滅的な打撃を受けるが、同じ頃、フィレンツェ毛織物工業の一部ではレヴァント市場への進出が開始、ないし再開されていたため、毛織物工業全体としては大きな打撃は受けなかった。フィレンツェ毛織物工業は一四世紀後半も順調に発展していったのである。

では、一四世紀を通じてのフィレンツェの毛織物生産量はどの程度だったのか。著者が利用できる限りの史料と状況証拠から行なった推論によると、「一四世紀前半における毛織物工業の繁栄」神話の論拠となった、年代記作者ヴィッラーニの提示した有名な数字（年間生産量七万―八万反）については、全く否定的な評価を下さざるをえない。著者によれば、一四世紀は前後半通じて二万反―三万反、一五世紀前半は一万一千反―一万二千反が妥当な線であろうということである。最後に、一四世紀後半以降フィレンツェの毛織物は、サン・マルティーノ区で生産される高級品「サン・マルティーノ毛織物」と、他の地区でより安価な原毛を利用して生産される二級品「ガルボ毛織物」に分化し始めたことが述べられる。

第五章、「一五世紀後半における毛織物工業の構造変化」では、当該時期における毛織物生産の回復と「ガルボ化」の問題が中心に取り上げられる。まず、一五世紀前半にフィレンツェ毛織物工業は停滞期をむかえ、その生産量は減少した。その原因は定かではないが、財政負担の増大や原毛の不足が考えられる。これが一五世紀後半も続き、この時期フィレンツェ毛織物工業は衰退したとするのがドーレン説である。が、著者は、ドーレンがフィレンツェ毛織物工業の衰退の印ととったフィレンツェ国内における外国製品の侵入や地元製品の不足を、むしろ外国向けの輸出が増大したからだと解釈し、同工業は回復に向かったとする。これは単なる推論ではなく、生産が前半より増大したことを証言する史料も存在する。そして、この回復を支えたのが、新たな市場と原毛輸入先の開拓であった。

さて、一五世紀後半開拓された市場でもっとも重要なのはトルコ方面である。この地方の需要に応じてフィレンツェの製造業者はむしろ低価格の羊毛を原料とする毛織物の生産をめざし、多くの織元がこの市場向けのガルボ毛織物に特化していくことになった。そして、この毛織物のための羊毛は、新たに中部イタリアやスペインから輸入された。これが一五世紀後半における「ガルボ化」である。ただし、高級な「サン・マルティーノ毛織物」の生

産がなくなったわけではない。この時代、教皇たちによって再興されたローマが、最高級毛織物の重要な新市場をフィレンツェ織元に与えたのである。またイタリア南部も、フィレンツェの最高級毛織物にとって重要な販路であり続けた。

尚、付論では、毛織物の一織元、アルビッツィ家の経済活動について、今まで紹介されていない若干の史料を加えて描写がなされている。

三

以上が本書の内容であるが、一見して非常に専門的なことがわかるであろう。実際著者は、イタリア経済史に関して多少なりとも知識を持った人を対象としており、本書を日本語で出版する意志は持っていなかったらしい。しかし、齊藤氏が「訳者あとがき」で正当に述べられているように、フィレンツェの毛織物工業の盛衰は、毛織物工業組合の織元やそこで働く人々を通して、当時のフィレンツェの政治や社会とも密接な関係をもっていた。それ故、本書の内容は、経済史家のみならず広く一般の歴史家、特にイタリア中世史を専攻するものにとっては等閑視できないテーマなのである。また、本書の視点が、イタリア内部に留まらず、国際的に活躍したフィレンツェ商人の軌跡に沿って北西ヨーロッパや地中海地域にまで及んでいることは、本書の重要性が単にイタリア史に限定されないことを意味しよう。従来、フィレンツェ毛織物工業の盛衰については無批判に言及されることが多かったため、信頼できる基本的文献が日本語で提供されたことの功績は大きい。我々後学の徒にとっても非常に有り難く、本書訳出の意義はまさにそこにあるといえよう。また本書は、多くの商品学用語を丁寧に説明することで、当時の公証人文書等の史料を読まねばならない研究者に、貴重かつ有益な情報を提供している。その点も、本書の有用性として高く評価できよう。

しかし、本書の価値は、単にそのテーマの重要性や、そこで提供された知見の新しさにとどまるものではない。そもそも、細かな史料分析を、いかにして広い視野を持つ歴史変化の中に位置づけるかという問題は、常に歴史研究者に突きつけられた難題だが、本書は「フィレンツェ毛織物工業」という限られた枠内とはいえ、見事にそれに成功しているのである。著者は、会社帳簿等の新たな史料発掘に加え、従来から知られていた法令・規約史料の類に新しい解釈を施すなど、様々な角度から毛織物工業を分析することによって、一三世紀末から一五世紀までの同工業の動態を構築していく。一見何の変哲もない関税資料や毛織物の種類の説明から、フィレンツェ毛織物生産の推移の大きなうねりが再生されていく様は、謎解きのようであり、決して読者を退屈させない。本書がその高度な専門性・実証性にもかかわらず、読者の知的興奮を掻き立てる魅力的な書足り得てるのは、まさにこのデータと論理の幸福な結合によるものだと言えよう。著者の手腕には敬服する次第である。

とは言うものの、本書全体を振り返って、いくつか気になった点がないわけではない。従って以下、三点にまとめて（その内のひとつは純粋に訳書の問題だが）、それらを記すことにしたい。

まず、原著とは関係のない訳書特有の問題として、日本語版のタイトルが気になった。本訳書のタイトルは『中世後期フィレン

ツェ毛織物工業史』となっているが、冒頭に紹介したように原著のタイトルは“L'arte della lana”であって、“L'industria laniera”ではない。‘arte’とは、英語の‘art’と同じく「技」とか「特殊技能を要する職業」という意味を持つ語で、さらに中世のイタリアでは同職組合をも指した言葉である。これは評者の推測にすぎないが、星野氏は、中世イタリアの毛織物業は金細工などと同じように職人芸の性格が強く、ドーレンが描いたような資本家とプロレタリアートから成り立つ工業ではない、という考えから、あるいは毛織物の種類のような技術的な話や毛織物商人・織元の活動の話も含んだ本書の内容により即しているという考えから、“L'arte della lana”というタイトルを付けられたのではなかろうか。そうすると、“L'industria laniera”に相等する「毛織物工業」という訳語では、原著のタイトルのもつ含蓄がうまく伝わらないように思える。勿論、我が国の学界では、毛織物工業という呼び方が定着しているという事情もあったろうが、注で説明するなど工夫の仕様はあったであろう。さらに、評者は一九九四年度の京都大学における集中講義で、齊藤氏自身から本書のタイトルの訳語に迷ったという話を耳にした記憶がある。もしそうなら尚更、注か後書きで訳語決定の経緯を詳しく述べていただきたかった。

次に、本書は、毛織物工業の盛衰、市場の移り変わりや製品の質の変化については、明確な歴史像が得られるとはいうものの、それがフィレンツェの社会構造にどのような影響を与えたか、またフィレンツェという都市世界とどのような関係を持っていたかについては殆ど言及がないので、その点が惜しまれる。もっとも、星野氏の関心は、都市の社会構造ではなく、毛織物生産の様態と原毛や製品の国際的流通にあり、本書が評価されたのもまさに、フィレンツェ市内に視点を定めず国際的連関の中に置いて同工業を捉えたことにあるので、このような批判は、あるいは不当であろう。しかし、著者が、毛織物の大量生産はもはや一四世紀前半に置いて当てはまらないとするにもかかわらず、中近世を通じてフィレンツェを「毛織物工業都市」と性格付け、そこに同工業の研究意義を見いだすのであれば、同工業がフィレンツェに置いて占める位置、同工業に携わる人々の範囲や社会階層とそれらの人々の相互関係について、多少なりとも御自身の見解を表明していただきたかった。

また、この問題は、星野氏が本書の数カ所で用いられている「工業化」「工業都市」という言葉の使用とも関係している。というのは、例えば、著者は、中世後期における毛織物製造業の質的向上と普及を「イタリアの工業化 industrializzazione italiana」と言い（八一頁等）、一三世紀後半に毛織物を生産していたロンバルディアの自治都市を「工業都市 città industriali」と呼んでいる（一九頁等）が、これらは、単に「毛織物業の質的向上と普及」、「（自治）都市」と記述しても意は尽くせたのではないか、と思うからである。そして、評者がこのような細かい言葉の使用に気を留めるのは、昨今の歴史学では一般に、「工業化」といえば産業革命ないし一八世紀以降にみられる本格的な工場制工業化を指すことが多いという理由もさることながら、ここで、著者がわざわざ（或いは意識せずして）「工業化」「工業都市」という言葉を使用したところに、毛織物業に最初の資本主義の萌芽を認める

経済史の立場の反映、特に中世フィレンツェの毛織物製造業を、技術革新後の工場制工業と質的には殆ど変わらないものとするような姿勢の反映を見る気がするからである。つまり、著者は実証レヴェルでは一四世紀前半の毛織物大量生産の神話を否定しタイトルでも‘arte’を用いたにもかかわらず、潜在的イメージとしては、中世の毛織物業は近代のそれと質的に異ならない「大工業」であったという見解から抜け切れていないのではないか。その結果、先に述べた都市社会における同工業の明確な位置づけの欠如も手伝って、数々の実証データが示す当時の毛織物業の実体と「工業化」や「工業都市」という言葉が醸し出すイメージとが齟齬を来しているような印象を受けるのである。もとよりこれは、素人の妄言にすぎないであろう。が、中世イタリア都市の社会構造にむしろ関心がある者としては、やはりこの点に関する星野氏の意見を読み、教えを乞う機会を失ったことが惜しまれる。

最後に、本書の構成について原著・訳書の双方に一言述べたい。実は本書は、各節は非常によくまとまり論点も考察内容も理解しやすいのだが、節と節、章と章の相互連関が若干見えにくいのである。これは各章がそれぞれ独立した論文に基づいているため、また、史料の残存状況から、ひとつの事象を証明するのに、様々な史料を用いて複数の角度から論じ、ときには推論を重ねるという作業を行なわねばならないため、ある程度仕方ない面はあろう。が、読者としては、もう少し各節、各章の本書全体に対する位置付けがわかりやすいような形で記述されていた方が有り難かった。また、全体をまとめる結論部がないため、読後に本書全体の見取り図が描きにくいのも事実である。もっとも、これは、論文や著書の最後には全体のまとめをするというスタイルがわが国では主流なためであり、実証を旨とするような本書では、イタリアでは反って結論などない方が自然なのかもしれない（イタリアの実証論文では、しばしば結論のないものも見かけるのが実状である）。ただ、もしそうだとしても、日本で新たに出版するにあたり、齊藤氏が以前の書評を利用するなどして、「結」にあたる部分を補われてもよかったのではないかと思うのだが、いかがであろうか。

以上、大雑把な話・勝手な感想ばかり書き連ねた形になり、書評の責を果たし得たかどうか心許ない。評者はイタリア中世史を専政するとはいえ内容に関しては全くの素人であるため、史料やそれについての著者の解釈、北西ヨーロッパや地中海の経済情勢に対するコメントは差し控えさせて頂いた。誤読・誤解の段については専門家諸氏の御海容を乞う次第である。また、齊藤氏には、訳書出版の御苦労や困難さも顧慮せず勝手な注文をつけたことを、お許しいただきたい。実際、齊藤氏は、専門的な言葉には本文中に注をつけ、イタリア人にしか通じないような修辞的表現は分かりやすく言い換えるなど、かなりの配慮をされているのである。文章も平易で、「本書をより多くの人にとってわかりやすいものにする」という訳者の意図は十分達せられているといえよう。最後に、今は亡き星野氏に心からの敬意と追悼の念を表して筆をおく。

① 「一九八〇年の回顧と展望」『史学雑誌』九〇―五、一九八一年、八六一―八六二頁。

② 齊藤寛海「書評、星野秀利著 *L'arte della lana in Firenze nel basso Medioevo. Il commercio della lana e il mercato dei panni fiorentini*

secoli XIII-XV」『信州大学教育学部紀要』第四七号、一九八二年、二七七—二八六頁、『社会経済史学』四八—六、一九八三年、六九六—六九九頁。また *Journal of Modern History* 55, 1983, pp. 750-54. でも、星野氏の他の著作と共に書評されている。尚、近年齊藤氏が翻訳・解題された、フィレンツェ大学経済学部教授ブルーノ・ディーニ氏による追悼論文『フィレンツェ毛織物工業史家、星野秀利』（信州大学教育学部紀要、第八六号、一九九五年）も本書の書評となっている。

③ ドーレン及び、毛織物工業の資本主義的性格をめぐる論争については、森田鉄郎著『ルネサンス期イタリア社会』、吉川弘文館、一九六七年、一三九—二〇六頁、同「中世イタリア都市の繁栄の性格——フィレンツェ毛織物工業を中心として——」『中世イタリアの経済と社会』、山川出版社、一九八七年、二〇三—二五三頁。

④ 星野秀利「中世フィレンツェ毛織物工業の歴史的性格——チョンピ一揆研究のための一試論——」（上）、『社会経済史学』二一—五・六、一九五五年、一〇七—一二七頁、「同」（下）、『社会経済史学』二二—一、一九五六年、二七—三四頁。

（A五判　一一＋四〇二頁　一九九五年一二月
名古屋大学出版会　一〇三〇〇円）

（京都大学人文科学研究所助手